

彙報

2012年度地域シンポジウム抄録
子育て支援のネットワークづくり ～親の育ちを支えあう～

シンポジウムのねらい

「子育て支援」という用語が広く用いられ定着してきた感がある一方で、それが誰に何を支援することなのかは、多様な視点から語られている。多様な子育て支援があることは望ましいことだとして、核家族化が進み、市外から移り住む人も多いこの地域で、必要な人に必要な支援が届いているのか懸念される。

このシンポジウムは道北地域研究所主催により企画され、乳幼児期の子をもつ親の現状を語りあうことを中心に、学童期・思春期も視野に入れながら、親としての成長を支えあう専門職・機関、子育て当事者、子育て経験者の連携・協働の可能性について考えることをねらいとして、2012年11月10日（土）13時30分より、名寄市立大学本館321教室で開催された。以下に基調講演と、パネルディスカッションのうちパネラー報告の概要を掲載する。

基調講演：ネットワークづくりと「親育ち」—さっぽろ子育てネットワークの経験から

北星学園大学准教授／さっぽろ子育てネットワーク代表 河野 和枝

1. はじめに

日々の子育てに悩み苦しむ母親たちを「母親なのだから子どものために我慢しがんばりなさい」と叱咤激励し、悩みをはねのけることが少なくなっている時世である。それだけ若い母親の子育て状況を理解し、支援がしたいと思う国民の割合が増えてきたと言ふべきであろう。今や地域子育て支援センターは道内各市町村に設置される現況にある（2012年12月現在179市町村中150市町村281ヶ所設置、北海道保健福祉課調べ）。

なぜ若い母親たちは子育て困難に陥るのか、現代の子育て環境や親になる生育歴から要因となるいくつかを挙げてみるが、背景要因は単純把握に留まらず、これらも含めた複数要因が重複していると理解している。

一つ目は、現代の子育て環境である。いわゆる日本女性の年齢階層別労働力率がM字型であり、欧米などの逆U字型ではないことから理解できる。すなわち、専業主婦に象徴される性別役割分業が確立するジェンダー思想を背景とする「子どもは母親が育てるもの」、特に3歳までは母親の愛情不足は子どもの成長発達に課題を残すという「3歳児神話」論に後押しされ、出産を機に退職し専業主婦となり子育てに専念する女性が今も健在であることである。しかし核家族であること、都会がもつ閉鎖的住宅事情、地域関係の希薄化などにより身近に相談する人間関係や子どもを預けられない環境、さらに消費文化が進んだ生活環境では、子育てアイテムがお金さえあれば人を頼らずとも手に入るようになった。授乳、おむつなどベビー用品の多くは商品化され、いつでもどこでも手に入るようになったのである。その上、父親の労働環境は意志があっても育児参加できる条件がなく、結局母親一人で子育てを担う家庭が多く「煮詰まる子育て」に追い込まれる環境が重なる現況にある。カプセル子育ては、親ばかりでなく子どもの成長発達にも影響が及ぶのである。

もう一つは、親になる子どもの育ちの環境変化である。兄弟の少なさが赤ちゃんとの出会いを少なくしている。従姉妹関係も少数となり親戚にも赤ちゃんがいない、つまり親になる成長期において赤ちゃんに接することなく成人し、突然親になる子どもたちなのである。しつけ以前に子どもの抱き方、あやし方すべてが未経験である親は、即不安につながり、しかもその不安は、誕生したその日から24時間365日エンドレス状態になるのだから本人たちにとっては地獄である。近年は出産年齢が高齢になり40歳代に入ってから母親になるケースも多く、親の思いが通らない子どもに苛立ち不安度を高くしているとも聞く。

他にも新自由主義社会が求める競争社会の子育て環境は、幼い子ども時代から未来への教育投資が必要と親たちの価値観を揺すぶり「賢い子、すなわち競争社会に勝ち残る子ども」に育てなければならないと必死になる親も存在する。しかし、子どもは親の思いのままにはならず、虐待まがいの言動に走ったり、子育てに自信を失ったり、ついにはしつけや教育が商品化された外注に委ねる家庭も増えている現状でもある。

このように現代の子育てを概観すると、これまで人類の歴史の中で深く関わってきた「家族の営み」「地域の営み」としての子育て、「親であることの役割」「地域の役割」に大きな変化をもたらしていると捉え、その変化を仮説として「親とは、地域とは」が問われていることを前提に「子育て支援」を考えなければならないと捉えている。過去17年間活動してきた、さっぽろ子育てネットワーク（以下、子育てネット）の経験を基に述べたい。

2. さっぽろ子育てネットワーク設立まで

社会教育を考える市民組織「札幌社会教育を語る会」で「札幌の子どもたちは今」をテーマに取り上げた。保健婦から乳幼児を抱えた親たちの孤立化が年ごとに厳しくなるという現状報告があり、検診時にサークル活動を勧めたところ多くの母親たちが集まって来ている。しかし保健所はサークル活動の場ではないことから社会教育が引き継いで母親たちを支援してもらいたい。またアレルギーによるアトピー性皮膚炎を患う子どもを持つ親の会からも、「そんな病気にさせて母親は子育てを放棄している」と責められ外に出られない母親もいると話し、学童期の問題と併せて乳幼児期の子育て問題が多く出された。その結果、母親たちや関心がある市民が集まり、学びながら子育てを考える組織が必要との合意形成が作られていった。当時、大阪府貝塚市では、公民館主事と親たちでの「貝塚子育てネットワーク」の活動が目撃されていた。親たち自身の要求で学習や子どものための活動をつくるのが、親たちの成長につながるという実践であり、札幌でも親がつながり学び合う子育てネットワークがほしいと機運が盛り上がり準備されていった。

3. さっぽろ子育てネットワーク設立後の活動

1994年、若い母親たちが中心となり市内の子育てに関わる団体やサークル、また子育て環境を考えたい市民などが集まり設立準備会の活動が始まった。1年を経て1995年設立、本格的に活動が始まった。組織化の準備、設立に多く関わり初代の事務局長になったT氏（当時、北海道大学大学院生）は、「子どもの現状を見つめると大人の責任が問われていることがわかる。様々な活動が行われていても連携がない。保育・医療・福祉・教育・司法など領域を超えたヨコのネットワークを形成していない。そのための組織が必要である」と、札幌の現状と子育てネットの必要性をまとめている。

設立時、乳幼児の子どもを育てる若い母親たちの参加が多く、スタートは乳幼児期の子育て課題の学習会や、参加団体やサークル活動を互いにわかり合うことをテーマにした。しかし、子育てネットは何をすべき団体なのか定まらず試行錯誤の連続であったが、1998年「第14回子育て・文化協同全国交流研究集会」（2日間開催、講演と13分科会、交流会）の開催要請があり、設立間もない子育てネットがその窓口となることを決めた。1年かけての集会づくりは、地域の子育て団体や関心のある個人をつなげ、ひろげ、関わる会員も経験を通し、つながることの意味や子育てネットの役割を学ぶ機会となった。ある母親は「分科会という意味さえ分からなかった。全国の実践を聞き、子育ては親も含めてみんなで関わるのが大切だと初めて知った」と感想を述べている。その翌年から若い母親たちの活動が大きく広がっていった。乳幼児の子どもを育てる親たちが、親子音楽会、野外活動、親のための学習プログラムなど自らが必要な企画を提案し、会場探しから保育者探し、チラシまきまでしながらやりたいことを実現していった。といっても困難なところは先輩や専門家が応援することで乗り越えた。子育てネットの組織構成は、当事者だけで組織する子育てネットワークとは異なり、異年齢、異業種、団体・個人がまざりあう会員であり、つまりそれぞれの出来ること

を「このゆびとまれ」で集まれる人々の集団であることが若い母親たちを応援し勇気づけていた。

また子育て・文化協同全国交流研究集会で記念講演をした小出まみ氏（元市立名寄短期大学教授）とのつながりから、カナダ生まれの子育てテキスト『Nobody's Perfect 完璧な親なんていない』の原本を訳しながら学ぶ機会が得られたことも「日本の子育て事情」を振り返ることになり、学び合うネットワークの重要性を確認していった。子育てネットは17年の活動経歴がありその足跡を「15周年記念誌」にまとめている。メンバーの子どもの成長に合わせ、思春期・青年期の課題を学び合う場面では、乳幼児を抱える親たちと一緒に学ぶことで、子育ての見通しを持てる親になることを期待している。子育てネットは会員制であるが、活動はいつでもオープンにし会員外の参加を自由にしている。学習活動を通して人のネットワークを広げ、参加者からまた活動のネットワークを広げることをくり返してきたのである。

最近では、学習活動の主体として活動するばかりでなく、団体会員の活動場所や児童会館などに出向き地域の人々をつなげながら学習活動を組織する、いわゆるコーディネーターの役割を果たすことにも取り組んでいる。数年前から中学校と地域子育て支援拠点をむすび、中学生、若い母親、地域の住民（高校生や青年、障害をもつ子どもや大人、母親OB、高齢者、支援者など多様な人々の混ざり合い）で「赤ちゃんを育てる体験交流会・妊婦体験会」を催している。中学生にとっては初めての赤ちゃん体験でワクワクドキドキ、お母さんたちは中学生と交流し子育ての先が見えてくる、地域の人々はみんな子育てすることを実感する等学び合う効果になり「絆・つながり」を作っている。何よりも子育て拠点にみんなが出入りできるきっかけとなり、中学生にとっては日常体験の出来ない環境とつながる意味は大きいと評価されている。

昨年度からは、市内の子育て支援に関わるNPO法人や市民団体に声を掛け「札幌市子育て支援を考える会」を月1回定例で交流している。支援を豊かにするための情報交換や学習などを経て、札幌市の子育て支援政策として提言できるならばと考え、進行中である。この会では、関連行政と意見交流会も実施しているが、子育てネットが橋渡しをする役も務め、市民と行政をつなぐ役割が生まれていると言える。

4. さっぽろ子育てネットワークの「親育ち」

設立時の記念講演は「子育て・親育ち・子育て」を演題に、北海道教育大学札幌校教授の小島喜孝氏（子育てネット複数代表のひとり）が行った。このテーマが子育てネットのモットー（合い言葉）であり、ミッション（使命）であり、コンセプト（柱）である。この間「子育て・親育ち」が正しいとの指摘もあった。すなわち一番の目的は「子どもの育ちあい」で「子育て」「親の育ちあい」になると言うわけである。そうなのだろうと納得しながらも、子育てネット設立時に「親育ち」にこだわりながらまん中に置き両脇に子どもとみんなの子育てを置いた。当初よく指摘されたが「親は育てるもの、だから親育てではないか」と言うことであった。子育てネットで言う「親育ち」とは、もちろん人々に育てられる存在ではあるが「無理矢理親はこうあるべきと押しつけられるのは嫌だ」「自分で考え力をつけた親になりたい、そのために親同士が育ちあう関係をつくろう」と、あくまでも自分の力を信じながら使っている「親育ち」である。

子育てネットの組織構成をみても会員の多くが親＝当事者である。もちろん自由な組織であるから会員の限定条件はなく、未婚者、既婚でも子どもがいない会員もいる。当事者も乳幼児の子どもの親、思春期青年期の子どもの親、独立した子どもの親と、親の年齢構成は広く、この広がりの中でそれぞれ「親育ち」がある。人間であれば誰もがその置かれた条件と状況の中で「子育て」の営みに関わり「人として育ちあう」ことになると考え、その環境を意図的に作り出しているのが子育てネットの組織であると言える。

「子どもが生まれたからと言って真の親になることは出来ない。子育てするから親になれる。親になるには仲間が必要」を合い言葉にし、カナダの子育てテキストから「完璧な親なんていない。だからヘルプと言おう」と学び、小出まみ氏からはアフリカの諺「1人の子育てには村中の人が必要」と教えてもらい、さらに「子育て観・親育ち観」が深まっていった。

2006年、教育基本法が改正され新しい条項に家庭教育が加わった(第10条)。そこには子育てに関して第一義的責任を持ち…親は務めるものとする、親責任と努力目標が強調されている。一方1989年国連採択、1994年に日本が批准した「子どもの権利条約」第18条では、親の第一義責任を全うするためにはそれなりの援助が必要と述べられ「親育ち」の環境整備は社会的責任としている。つまり親になるためにはその環境に合わせた援助がなければならないとしているのである。そもそも子育てする環境は援助があつてなりたつものであり、かつては地域環境のなかに援助関係が成立していたが、現代社会は意図的、目的的に援助のしくみを作らなければならなくなり、それが「子育て支援」のしくみである。

5. 子育て支援施策の登場と現状

日本における「子育て支援対策」は、1990年の1.57ショックから少子化対策としてスタートしている。戦後のベビーブームをピークに目に見える形で子どもの数は減り続けていたが、ここに来てやっと政治的対策が取られたというのが大方の見方であろう。仕事と子育ての両立という少子化対策のキャッチフレーズは、働く親の子どもを産む数が少ないから対策を受け止められたが、実際には専業主婦の子育て環境の困難があぶり出された(1999年春菜ちゃん事件等、虐待事件の数々)。今に至っては、「子ども・子育てビジョン」など子ども、親、家庭支援へと文言と施策の内容が変化し支援の枠組みを広げている現状にある。しかし少子化対策の概念は変わらず、支援施策の実施者は、民間企業やNPO、市民団体への委託などにみるように国の責任を放棄する傾向にあるが、にもかかわらず国民の自己責任は問われる子育て環境なのである。

6. 「子育ての社会化」をめぐる

子育てネットワークは、その多くが子育てサークル同士の私的な協同活動として1990年頃から始まった。その背景には、母親だけで子育てする限界を多く感じはじめた若いママたちが、公園や隣近所、学生時代の友人、あるいは病院・助産所などで仲良しになったお産仲間など数名が定期的に集うようになりグループ化し、元保育士や幼稚園教員などの経験者がリーダーになるなどしながら広まっていったのが子育てサークルである。中には全国規模の育児サークルもあり、情報誌を発行し全国各地に育児サークルが形成され、当事者同士の仲間づくりに発展していた。親子運動会、子育て講演会等ひとつのサークルでは実現不可能な企画を実現する目的で子育てネットワークが組織化されたが、そればかりでなく自分たちの活動場所を求めて行政機関等に折衝することや子連れで出かけられる環境整備の提案も活動の一環として広げていた。例えば、トイレや公共施設内におむつ替えのベッドを、授乳のためのスペースを、ベビーコーナーの設置を、など当事者ならではの声を発信する組織として子育てネットワークの役割を生みだし広げたのである。これらの活動は必要に迫られた母親たちの運動であり、その活動そのものが協同の子育てを生み出していき「ひとりぼっちの子育てをなくそう」の声に響き合っていた活動である。子育てネットを設立するために集まった母親たちの思いも同様であった。当時、札幌市では、エンゼルプラン札幌版策定に当たり、市の単独費で実施されていた「なかよし子ども館」制度(公園などで行う出前式青空幼稚園…地域の親子は誰でも参加できる)を廃止し、屋内を利用し参加人数限定の親子サロン、あそびの広場への事業変更が提案されていた。「なかよし子ども館」で地域の親子が出会い友だちが出来、自主的な親のグループ活動も作られ「誰でもいつでも参加できる親子の居場所は貴重」と存続を要望する母親たちが、子育てネットが必要と参加している。

一方支援体制が確立する過程では、多様な子どもや親も増え、支援者や専門家等で組織する「子育て支援ネットワーク」が各地で動き始め、課題の解決や子育ての社会化を推進する組織として位置づけられている。

このように、国の施策やNPO、地域住民組織による支援体制が整備される中、子育てネットワーク草創期のように親の支援もなく、必要に迫られて活動した子育てサークルは減少し、子育てサロン、子育てひろばなど公的にも私的にも親子の居場所が提供されそこに集う状況になった今日である。ある現場支援者は、子

育て支援の有り様を疑問視する声をあげている。提供されるサービスに依存するばかりで、親自身が育っているのだろうか、そのことを確かめる機会もない支援現場であるが、子育ては乳幼児期が始まりで、その後も続くことを考えると親が育つ支援でなければならず、今の支援内容でよいものかと按じている。

ここで「子育ての社会化」について私見であるが整理する。理念は、子どもは社会の宝、子どもを社会のみんなで育てていこうと、現実には私的な子育てを、親や地域住民、行政や企業もふくめ子どもを健全に育てるための諸条件や制度を作り、地域協同の子育てを創りあげようとする社会的合意と考えるとき、子育て支援施策が目指す「子育ての社会化」があいまいになっていることに危惧を感じている。

そのひとつが「行政サービスによる支援」である。子育て支援の現場では、利用者がホッと出来る場の提供、つまり親子の安全安心の居場所づくりにあることを優先し、支援者は見守りとして機能する役割がある。従って「親育ち」への積極的対応は極力避ける傾向が支援の現場に続いている。もちろん四六時中子育てに追われるものにとっては貴重な時間であるが、親はそのサービスを受ける利用者なのであり、子どもの成長とともに利用者ではなくなるのである。ある地方自治体から委託された保育園併設の子育て支援センターでは、子育てはその先も続くことを考え、このような支援内容に疑問を感じ、親同士をつなげながら、親が持つ多様な力量を引き出しつつ行う主体的活動を応援する、何があっても子どもと向きあえる力をつける学びあいを実践している現場もあるがその数は少ない。

もうひとつは、「市場化によるサービス」である。官から民へ、新しい公共という概念も一般化される中、子育てや教育の現場が市場化され、お金で用が足りる子育て支援サービスが多く提供されている。利害関係が明確で、複雑な人間関係を介さないですむサービスは、今時の親たちの心情にフィットし、市場のニーズも増加傾向にあるという。

これらの動向からみて、子育て支援施策が目指す「子育ての社会化」をどのように捉え実践していくのか、大きな課題を呈している。「親育ち」の課題と重ねて考えなければならない。

7. 子育て支援と「地域再生」～つながり合う子育て文化の再構築～

子どもや親の置かれている子育て環境や子育て支援の現状など、子育てネットの経験から述べてきたが、「子育て支援」をどう考えるかが課題になる。つまり、サービスとしての子育て支援なのか、協同の子育てを再構築する新しい取り組みとしての子育て支援なのかと言うことである。当然後者である。かつての地域共同体で見られた子育ての原風景は多くの地域で既に喪失している。しかし、何時の世も子育ては、親一人では完結しない営みであることは、今日の虐待事件などからも分かるとおりであり、新しい地域のつながりと支える力が求められている今日的現状にある。子育ての社会化を地域社会で実践するしくみとして「子育て支援」拠点施策が登場したと考えるなら、新しい子育て文化を地域に再構築し、孤立からつながりへ、ひとりからみんなの子育てへ、と「子育て」をキーワードに地域がつながり、新しい関わりのなかで協同の子育て文化を創造する可能性を含み、今その実践が始まっている。子育てネットワークや子育て支援ネットワークの活動は、その先駆的役割を果たす社会的しくみであることはこれまでの活動経験から学んでいる。親子の居場所としての子育て支援拠点を真ん中に、地域子育てネットワークの輪がひろがり続けるなら、地域住民のつながりを取り戻し新しい地域づくり、すなわち「地域再生」に結びつくのではないだろうか。

<参考文献>

さっぽろ子育てネットワーク編『子育てハンドブック このゆびとまれ！』1996年

第14回子育て・文化協同全国交流研究集会札幌実行委員会編『このゆびとまれ！ つなごう子育ての輪inさっぽろ』1999年

さっぽろ子育てネットワーク編『このゆびとまれ！ 2』2010年

報告① 名寄市地域子育て支援センター「さくらんぼ」の現状について

名寄市東保育所主任「さくらんぼ」担当 奥村 澄子

名寄市地域子育て支援センターは平成11年度にスタートして、今年で14年目になります。旭川市内の支援センター開設に続いて、旭川以北では最も早い時期に開設しました。2年後の平成13年度には、大谷幼稚園の旧園舎ホールを借りて市内2ヵ所めの支援センター「ちゅうりっぷ」がスタートしました。現在名寄市の子育て支援センターは、大谷認定こども園の「ちゅうりっぷ」、風連さくら保育園の「こぐま」、東保育所の「さくらんぼ」の3か所となっています。

「さくらんぼ」の日々の活動は、月・金曜日の「いつでもどうぞなかよしランド」と水曜日の「びよびよランド」では東保育所の「さくらんぼ」の部屋やホールで遊びます。「びよびよランド」は0歳児対象で、生後2～3か月の赤ちゃんから来ている方もいます。火・木曜日には児童センター「ほっと21」の体育館と児童室で遊びます。

主な利用者は0才から2才の親子です。3才になると、幼稚園の慣らし保育に行き始めたり入園する子ども多くなり、支援センターの利用が減ります。利用者の家庭は転勤族の方が半数以上いる状況で、「今年4月に名寄に来ました」とか「1週間前に引っ越して来ました」という方も少なくありません。だいたいは専業主婦の方ですが、育児休暇中の方も多くいます。身内や知り合いもいない方は、「さくらんぼ」に来る事で、子供と一緒に遊びながら母親同士の交流をして、子育てのみならず生活のさまざまな情報交換をしています。

月～金曜日の主な活動のほかに、月2回程度「親子遊びの広場」「人形劇鑑賞」「親子講座」「父親参加型事業」などの行事を行っています。行事は名寄市の広報でもお知らせしているので、行事の時に初めて参加する親子も多く、行事の時は参加数がとても多くなります。親子講座は定員を設けている場合もありますが、「いつでもどうぞ」を重視して、行事に出ない方もいつもどおりに遊びます。

年度末の2月には茶話会をして、子育ての悩みや情報交換を行い支援センターへの要望などを聞いています。普段も遊びながら話しますが、子供を託児してお母さんだけの場を設定することで、ふだんは出て来ない思いが色々聞かれます。可能な限り次年度に取り入れるようにしています。23年度は「市長さんと話そう」を企画し、「さくらんぼ」の部屋に市長を招いて直接話せる機会を持ちました。また南地域での遊べる場所の要望から、福祉センター2階にある「おもちゃライブラリー」の部屋を開放して、週1回程、午後2時から4時まで担当者が出向いて遊びの場にしています。おもちゃライブラリーはボランティアの方が当番制で週1回開放していますが、その利用も以前より増えていて、既存施設の有効利用になり、子育て支援の場も広がっています。

その他、保健センターの7ヶ月健診に行き、グループワークの中で、手遊びや親子あそび、絵本の読み聞かせをして子育て支援センターの紹介をしています。健診後に「びよびよランド」に来る方も多くいます。大勢のところは苦手とか一人では行けないという方に個別対応をするため、「すくすく広場」という枠を、基本的に第1、3金曜日の午後に設けています。中央保育所閉所後は場所的な問題もあって、こちらから出向く家庭訪問をしています。保健師の方から紹介があり、一緒に訪問してお話を聞いたり、お子さんの様子を見たり、遊んだりしています。

他には電話相談もメニューに入れていますが、電話での相談はごく稀で、問い合わせが主です。ふだんの育児相談では母乳、食事、トイレトレーニング、睡眠についてが多く、他に保育所入所や幼稚園の慣らし保育や入園、一時保育についての相談が多くあります。自分の子育て経験や保育士としての経験から知り得た情報を伝えることで少しでも参考になれば、と思っています。また担当者との相談というより、一緒にいるお母さん同士が色々な知恵やアイデアを出してくれることも多くあり、支援センターを和気藹々とした楽しい雰囲気にしてきている皆さんに感謝している次第です。

今年度の名寄市こども未来課の取り組みとして、休所になっていた風連日進の保育所へ月1回のバスツアーを開催しています。5月から毎回大型バス2台で沢山の親子の参加があります。子育て支援センター3か所間の交流、地域のお年寄りとの交流、学生との交流ができて意義のあるツアーになっています。青空保育事業も好評で外で遊ぶ機会が増え、「さくらんぼ」担当者2名だけではなかなか広げられない企画だったので、支援の広がりをうれしく思います。今年度末までの経過をみて、来年度さらに子育て支援の輪を広め、深めて行きたいと思います。

報告② 名寄市の母子保健と子育て支援の状況について

名寄市保健センター 保健師 住友 美和

まず出生状況です。平成20年には278人の出生がありました。昨年は「絆」の年ということで出生数も盛り返しましたが、今年度は母子手帳の発行数が減少していますので、赤ちゃんの数は今後減少していく可能性があります。

次に母子保健の流れを簡素に説明します。私たちは母子手帳交付時をお母さん達との出会いの場と考えていますが、お母さん方は半分が転勤族です。ここしばらく、初妊婦と経産婦の割合が半々でしたが、今年度は初妊婦の割合が少なくなってきました。初妊婦対象にお父さんお母さん教室を開いています。ここには「名寄本読み聞かせ会」さんに来ていただき、絵本の読み聞かせと図書館の乳児対象の事業をPRしてもらっています。赤ちゃんが生まれたり、「こんにちは赤ちゃん訪問」にお伺いします。全戸訪問事業ですが、今まで100%訪問できています。初産婦さんでは育児全般、母乳、体重増加の質問が多く、第2子以降では赤ちゃんの心配ごとより、上の子への対応について質問が出る人が多いです。乳児健診は3、4か月と7か月に実施しています。7か月健診ではグループワークを取り入れ、子育て支援センターの保育士さんに来ていただき、絵本の読み聞かせと支援センターのPRをしてもらっています。その他の保健事業として月1回、赤ちゃん計測日を設けています。初めて参加される方には、お母さん同士の情報交換とお友達作りを目的にグループワークに参加していただいています。幼児期になりますと、1歳0か月児対象の「のびのび親子教室」があります。乳児期から幼児期への移行期で親の戸惑いも多いため、親子遊び、グループワークを取り入れ子どもの成長を確認する場としています。1歳6か月児健診と3歳児健診では「ママの声聞かせて」という用紙を事前に送付し、それをもとに待合の場で母子支援専門員が質問に答えています。1歳6か月児で5割、3歳児で4割ほどの保護者が声を出してくれています。内容としては1歳6か月児ではだだこね、かんしゃくへの対応が多く、3歳児ではしつけ、おむつはずしなどが多いです。健診の事後として、1歳児対象の「ちびっこひろば」や事後相談を行っています。要支援者についてですが、支援が必要な保護者はほとんどが母子手帳交付から3、4か月児健診の間の早い段階で支援が必要と判断されています。

最後に、3歳児健診の中でどれくらいの児が日中に排尿が自立しているかを報告します。平成15年度はおむつ有が10.6%でしたが、平成23年度は62.0%です。おむつはずれの時期がどんどん遅くなっています。遅くなることの善し悪しではなく、これだけ大きく育児環境が変わっているということの表れだと思っています。

報告③ 名寄市社協ほのぼの倶楽部の活動から

名寄市社会福祉協議会 三品 百合子

名寄市社会福祉協議会の地域支援系のなかに、ほのぼの倶楽部という活動があります。ほのぼの倶楽部の発足は平成11年にさかのぼります。家庭生活においてできないところの支援からはじまり、平成12年度からは介護保険ではできない部分を補う支援ということで現在に至っています。掃除、調理をはじめとした生活援助、軽介護、見守りなどの支援を行ってきましたが、ここ最近ではわずかですが子育てをするお母さんからの相談が増えてきました。内容はさまざまですが、お母さん自身が病院の受診に行きたい、美容室、手続き事、買い物に行きたいといったような内容で、子どもを見てほしいということがあります。病院に行きたいという場合、お母さんが診察室に入っているあいだ待合室でお子さんを見ている場合と、ご自宅で赤ちゃんを留守番をしている場合があります。そのほかには、掃除や買い物など出産後のお母さんのサポートとして一時手伝ってもらえないかということや、子どもの予防接種のあいだ下の子どもを見てほしいという相談、参観日や卒園式、入学式といった時に下の子どもを見てほしいという相談もありました。卒園式の時には下の子どもを連れて行ったけれども、泣いたりチョロチョロし出して卒園式のムードを味わっている暇がなかったということから、入学式の時には子どもを置いていきたいという依頼で、ご自宅にお伺いして下のお子さんと留守番をしているということもありました。子育て支援の報告にもありましたが、転勤などで引っ越してくる方が市内に親御さんがいないとか、預けて見てもらえる人がいないということから、関係機関、たとえば保健センターから紹介されて来られる方もいらっしゃいます。

ほのぼの倶楽部は、利用したいという利用会員、お手伝いしてもいいですよという提供会員から成り立っています。提供会員は、家庭の主婦、子育て経験者のお母さんたち、ヘルパー 2級の修了証をお持ちの方たちなどが登録をされています。現在の人数は、提供会員14名、利用会員29名、そのうち定期的に利用しているのは15名ほどの方たちです。子育て関係では、定期的ではないですが、5名の子育て中のお母さんに会員になっていただいています。

利用者から相談があったときは、赤ちゃんをどういう状態で見たらいいか、時間的な問題など、お母さんのニーズがあります。利用時間が5時間を超えると、毎日来てほしいとか、働くお母さんの相談もあります。そのような相談には、保育所関係をご紹介する方がいい場合もあります。本当に急なことで、例えば旭川まで行かなければならないとか、朝に出かけて夕方まで帰ってこられないというときには、5時間を超えてしまいますが、対応が可能かどうかは提供会員との相談になります。1人では見きれないときは、2時間とか3時間で交代する場面も出てきます。提供会員の協力があって成り立つことで、可能な限りということを利用して相談しながら行なっていることもあります。なるべくニーズには応えていきたいのですが、提供会員は常時社会福祉協議会に勤めている方たちではなくて、家庭におられる方たちです。その方たちに電話連絡をして、都合が良ければ行っていただくというシステムです。面倒なようですが、社協と利用会員、提供会員の三角関係のなかで相談を受けたり、お話しをさせていただいています。提供会員は日中働いている方もいたり、午前だけなら、午後からならいいという方、土日もいいよという方もいます。掃除とか高齢者の話し相手ならいいという方もいれば、小さいお子さんを見るのも大丈夫という方、さまざまな得意分野を聞いておりますので、できるところの支援をお願いしています。ただ、深夜とか早朝、夜間になると提供会員からOKが出ないことには、対応がむずかしい場合も出てきますので、利用会員の相談内容からお断りすることもあります。社会福祉協議会では、いろいろな場面にあった相談や提供会員の活動に対して、橋渡し役、コーディネーター的役割を担っています。

報告④ 地域みんなで子育て

助産師／子育て・親育ての会代表 吉田 征子

この地域で4人の子どもを育てた経験から今思うことは、「もっと学びたかった」「みんなと手をつなぎたかった」とうことです。私たちは、親になるための教育やトレーニングをほとんど受けることなく子育てしています。初めての妊娠出産の不安や、思春期にむかう子供への不安はとても大きいのです。そのような経験から仲間たちと、また個人として取り組んできたことを紹介します。

1. 妊娠中の方を支える取り組みとして、平成12年から夜間お母さん教室を土曜夜開催してきました。ほとんどが夫婦での参加であり、核家族化が進み、夫婦2人に子育てが任されている現状の中で、子育てについて共に学び支えあうきっかけとして重要な取り組みと考えます。
2. ある母親から思春期にむかう子供への不安の声が上がり、学年行事の中で「いのち」について取り組んでいます。「命のバトン」講演会、名寄市立総合病院新生児室において赤ちゃん見学、宇宙の話、死についての話を1年間実践しました。
3. 地域周辺の子育てを支援するため、平成18年「子育て・親育ての会」を結成しました。子育てについて身近な問題や思いを知り、ともに学びあうという雰囲気を地域の父親・母親サイドから起こし、子育てを地域で共に考えていこうという意識を高めることを目的としています。様々な講演会や学習会、体験講座などを開催してきました。地域の産婦人科医師による「思春期の性の現状」講演会、小児科医師による「虐待としつけ」「発達障害」「外来から見える親子関係」、旭山動物園園長による「伝えるのは命の輝き」、札幌医科大学澤田いずみ氏による「やってみよう前向き子育て」などです。
4. 平成15年から小中高校、子育て支援センターなどの依頼を受け、「いのちの大切さ」「子育て」「デートDV」「子育てヨガ」などの出前講座を開催しています。ある高校は、町と連携して「赤ちゃん体験講座」を実践しています。私の話を聞いた後に保健センターに出かけ、赤ちゃんを抱いたり、お母さんお父さんから子育ての話聞くという内容です。一度も赤ちゃんを抱いたことがないまま、自分の子どもを抱く母親が多くなっている現状がある中で、中高生は数年後には親になり、人を育てていく立場になります。子育てについての教育や体験を通して子育てを学ぶ必要があると考えます。
5. FM放送のパーソナリティーとして子育ての話をしています。今話題になっている子育て方法や、ニュース、思春期の性の問題、地域の子育て情報など、幅広く話題提供し、子育てのヒントにしてほしいと思っています。

現在、名寄市内には幼稚園、保育所、子育て支援センターなど、どこにも行っていない子どもが約100人いるという話を聞きました。すべての子どもと親が様々な機関とつながり、支え合って子育てしていけることを願い、この地域の子育て支援をこれからも考えていきたいものです。

